

重点取組分野	平成28年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①重点研究の中で、教職員が主体的・協働的な学びを通して思考力・判断力・表現力を高める授業の在り方を研究して日々の授業に反映し、児童の能力の育成を図る。②日々の授業に反復学習を取り入れるとともに、家庭と連携し、宿題や家庭学習を通し基礎基本の定着を図る。	①今年度から重点研究で算教科を取り上げ、主体的に協働的な学びの在り方を追究した。年間7回の研究授業を開催し、全職員が授業を公開して研鑽を深めた。②基礎基本の定着を目指して、反復学習に力を入れたり、机間指導を通して個に応じた指導を行ったりした。※学習状況調査では常に平均以上であった。	A
豊かな心	①学校保健委員会のテーマを「心の健康」とし、挨拶の大切さを考えたり、実践的な活動をしたりすることを通して豊かな心を育む。②司書教諭と学校司書が中心となり、図書ボランティアの協力を得て、図書に親しめる環境の充実を図る。③潜在的カリキュラムである教職員の人権意識の向上を図るため、研修に力を入れる。	①学校保健委員会のテーマを「心の健康」とし、挨拶の大切さを考えたり、実践的な活動をしたりすることを通して豊かな心を育む。②司書教諭と学校司書が中心となり、図書ボランティアの協力を得て、図書に親しめる環境の充実を図る。③潜在的カリキュラムである教職員の人権意識の向上を図るため、研修に力を入れる。	B
健やかな体	①一校一実践として、運動量が減る冬場の体力の維持・向上を図るため、朝の時間を利用してリズム縄跳びに今年度も取り組む。②日々の体育の授業で、一定の運動量を確保できるように配慮する。③児童会活動として廊下歩行の注意喚起をしたり、手洗いやうがいの励行を促したりする。	①長縄大会を計画し、楽しみながら体力向上に取り組めるようにした。②体育の授業では、一定の運動量が確保できるような授業展開を心掛けた。③保健安全委員会の児童が、廊下歩行の注意喚起をする活動を行った。	B
安全管理	①「危機管理における初動対応の基本原則-プロアクティブの原則-」を機会あるごとに教職員に周知し、事故の未然防止や適切な初期対応を行う。②質の高い情報の取得に努め、適切な判断ができるようにする。③事故の予見を見落とさず、危険要因の除去に心掛ける。	①危機管理については、確かな情報を迅速に収集し、児童の安全を第一に考えて判断した。管理職と職員が同じレベルの危機管理意識をもつようになっている。③施設や道具の劣化に伴う危険因子を未然に取り除くように努めた。怪我が発生した場合はその要因について把握し、必要に応じて施設改修等を行った。	B
児童指導	①児童支援専任との情報の共有化を密に行い、未然防止や適切な初期対応を行う。必要に応じて関連機関との連携を図る。②学級で起きる課題は学年主任を中心として児童支援専任が連携し、初期の段階で対応することを徹底する。③職員会議の前に、児童理解の時間をもち、学校全体で共通理解し、一貫した児童指導を目指す。	①人間関係トラブルや児童指導上の様々な課題については児童支援専任が中心となり、情報収集や対応に努めた。専任は管理職を初め関係職員と情報連携を密にとり、最善を尽くす努力をした。③児童指導上の課題は、学校全体で共通理解し、一貫した姿勢でかかわるよう心がけた。	A
地域連携	①創立10周年記念式典・祝賀会を行い、これまでの地域の方の協力に感謝の意を表す。②学校教育で大事にしていることを学校運営協議会やPTA運営委員会、学校説明会、学校便り等で地域や保護者の方に伝え、ともに協力して子どもの育成を図る。③地域行事を広くしたり、職員の参加体制を整えたりして、地域とともに子どもの健全育成を図る。	①創立10周年記念事業は、滞りなくすべての計画を実施することができた。式典・祝賀会では180名以上の方の参加をいただき、感謝の意を表すことができた。②学校の取組は様々な機会を通じ伝えるよう努めた。ホームページの更新は課題が残る。③職員一人につき年2回、地域行事に参加した。	B
特別支援教育	①療育センターあおばのコンサルテーションや通級指導教室のセンター機能、学校カウンセラーの活用を積極的に図り、専門的見地からの助言を参考に、学習や生活の障害を減らすように努める。②過度な、あるいは不必要な環境刺激を取り除き、落ち着いた生活環境となるように努力する。	①療育センターあおばや通級指導教室、特別支援学校の各センター機能を活用し、専門的な見地からのアドバイスを積極的に受けて、児童指導に活かすように努めた。②特に教室の正面は、すっきりした掲示を心掛け、刺激を抑えるように工夫した。個々の児童の特性に配慮した座席配置を心掛けた。	B
人材育成・組織運営	キャリアステージに応じた、適材適所の人的配置をし、組織の活性化を図る。メンターチームの活動は主体性を重視し、自ら高め合い支え合う集団作りを目指す。	①キャリアステージの異なる教員で学年を構成し、同僚から学んだり刺激を受けたりできるようにした。学年にメンター機能をもたせ、互いに支え合い高め合う場とすることができた。②メンターチームは自主性を尊重し、企画・運営を委ねた。直面している課題をテーマとし、先輩職員を講師として招聘した。	A
ブロック内相互評価後の気付き	今年で3年目を迎える心の教育について、改めてその重要性を感じる。児童は成長過程にあり、様々な事案を通して、心も成長させていく。心の教育について黒須田小学校では、人権・福祉教育や重点研究、学校保健委員会、児童会、図書館教育など多角的にアプローチしてきた。また、各ボランティアや教育相談員、ふれあい隊の方の活動にも支えられている。学校評価アンケートからも、心の教育の必要性が浮かび上がっている。来年度以降も心の教育に重点をかけた学校経営が求められる。		
学校関係者評価	学校としての総括評価は妥当であると感じている。B評価の項目については、具体的取組について検討し、結果を来年度に反映させ、目標がより豊かに実現する取組を願いたい。今年度メディアの取材を4回受けたことは、先駆的に意義ある教育活動を行っていることの裏付けと受け止めている。一時的な活動に終わらず、よい教育活動は息長く継続することが肝要である。ストレスチェックが良い結果であったと報告を受けたが、今後とも各職員が生き生きと業務にかかわれる環境作りをお願いしたい。		
学校経営中期取組目標振り返り	今年度設定した8項目の重点取組分野および具体的取組は、概ね達成することができた。特にここ3年、心の教育に力を入れてきた。今年度の振り返りでも、保護者のニーズと職員側の指導の必要感が心の教育で一致しているの、来年も継続したい。ストレスチェックがかなり良い結果となっていた。職員が仕事にやりがいを感じ、生き生きと働ける職場環境を維持することが、質の高い教育の実現につながるものと考えている。来年度も組織運営の視点として大切にしていきたい。		

重点取組分野	平成29年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①重点研究の中で、教職員が主体的・協働的な学びを通して思考力・判断力・表現力を高める授業の在り方を研究して日々の授業に反映し、児童の能力の育成を図る。②子ども・学校・家庭が話し合い、半期ごとの学習や生活の目標を共有し、指導過程と取り組み状況や「あゆみ」や面談等で丁寧に伝える。	①重点研究で取り上げた算教科を中心に、思考力・判断力・表現力を高める授業研究に積極的に取り組んだ。今後子どもが主体的に学べるような授業の工夫がさらに必要となる。②子ども・学校・家庭で目標を共有化することで、目指す方向や手だてが明確になり充実した指導が実現した。	A
豊かな心	①挨拶は校内で確実に成果を上げた。今後は地域の中で顔と顔の見え関係作りを進めさらに推進していく。②図書室の経営に意欲的に取り組む読み聞かせの充実を図った。③教育環境は教職員の言動が大きいという自覚をもち教師自身の人権感覚の向上を図った。	①挨拶は校内で確実に成果を上げた。今後は地域の中で顔と顔の見え関係作りを進めさらに推進していく。②図書室の経営に意欲的に取り組む読み聞かせの充実を図った。③教育環境は教職員の言動が大きいという自覚をもち教師自身の人権感覚の向上を図った。	B
健やかな体	①一校一実践として、運動量が減る冬場の体力の維持・向上を図るため、朝の時間を利用してリズム縄跳びに今年度も取り組む。②日々の体育の授業で、一定の運動量を確保できるように配慮する。③児童会活動として廊下歩行の注意喚起をしたり、手洗いやうがいの励行を促したりする。	①長縄大会に向けて各クラスで協力することの意義を考えて取り組んだ。②体育主任を中心に、運動量確保のための授業を推進した。③「ステップ15」を合言葉に安全な廊下の歩行のために互いに注意喚起する姿が増えた。	B
安全管理	①「危機管理における初動対応の基本原則-プロアクティブの原則-」を機会あるごとに教職員に周知し、事故の未然防止や適切な初期対応を行う。②質の高い情報の取得に努め、適切な判断ができるようにする。③事故の予見を見落とさず、危険要因の除去に心掛ける。	①確かな情報を迅速に収集するために、管理職を中心に関係課と密に連携をとった。管理職と職員が同じレベルの危機意識を持って取り組んでいる。③施設の劣化に伴う不具合や危険箇所については迅速に対応し改善に努めた。	B
児童指導	①児童支援専任との情報の共有化を密に行い、未然防止や適切な初期対応を行う。必要に応じて関連機関との連携を図る。②学級で起きる課題は学年主任を中心として児童支援専任が連携し、初期の段階で対応することを徹底する。③職員会議の前に、児童理解の時間をもち、学校全体で共通理解し、一貫した児童指導を目指す。	①児童支援専任を中心に児童間のトラブル等に迅速に対応し、初期段階での解決を図った。専任と担任・学年が密に連携を図ることで大きな事案に発展していない。③児童間で起きたことは小さな事であっても学校全体で共有し、教職員が多角的に見守り、指導できる体制と組織づくりを進めた。	A
地域連携	①学校教育で大事にしていることを学校運営協議会やPTA運営委員会、学校説明会、学校便り等で地域や保護者の方に伝え、ともに協力して子どもの育成を図る。②地域行事を広くしたり、職員の参加体制を整えたりして、地域とともに子どもの健全育成を図る。	①学校教育で大事にしていることを様々な機会でも伝えていくが、年度途中から横浜市の情報管理に変更がありホームページの更新に時間がかかるようになり今後の課題である。②地域行事への教職員の参加、授業への地域の参加の両方の体制が整い、学校と地域はしっかりと連携を図ることができた。	A
特別支援教育	①療育センターあおばのコンサルテーションや通級指導教室のセンター機能、学校カウンセラーの活用を積極的に図り、専門的見地からの助言を参考に、学習や生活の障害を減らすように努める。②過度な、あるいは不必要な環境刺激を取り除き、落ち着いた生活環境となるように努力する。	①療育センターあおばや通級指導教室等を活用し指導に生かすことができた。丁寧なケース会議を重ねる特性に合った支援を実施できた。②教職員で教室環境等のスタンダードをもとに教室経営を行った。学習の足跡を残すこととのバランスが今後求められる。	B
いじめへの対応	①児童の心の動きをとらえるためカウンセリングスキルに関する研修や療育センターあおばと連携しコンサルテーションの充実を図った研修を行う。②「特別の教科道徳」において、児童に自己を見つめ、より多角的・多面的に物事をとらえ、自らの考えを深める力を育む学習を取り入れる。	①傾聴訓練をはじめ、支援の必要な児童の見とり、YPAセサメントを利用した学級集団の分析など、丁寧な情報交換や研修の積み上げにより、様々なトラブルに適切に対応し初期の段階で解決することができている。②自己を見つめ、振り返ることができる道徳の授業を実施することができた。	A
人材育成・組織運営	①バランスのよい年齢構成の職場と学年3学級の強みを生かし、学年が異なるキャリアステージで構成されるように配置し、学年内が学びの場になり刺激を受ける場になって、組織全体が支え合い高め合う集団となることを目指す。②メンターでの活動にとどまらず、経験豊かな先輩職員を講師に招き、主体的に学ぶ機会を設定する。	①異なるキャリアステージの教員で学年を構成することでさまざまな刺激を受けることができた。また、組織全体が互いの良さを認め意欲を高める場になって、組織全体が支え合い高め合う集団となることを目指す。②メンターでの活動にとどまらず、経験豊かな先輩職員を講師に招き、主体的に学ぶ機会を設定する。	A
ブロック内相互評価後の気付き	・ブロック内評価でも高く評価された「豊かな心の育成」「主体的・対話的な深い学びの追及」を今後も学校経営の柱に据え、新しい教育課程の編成を進めていく。 ・組織的な児童指導・初期対応を実践し課題の早期解決を図った。今後も児童支援専任を中心とした組織的児童指導を継続していきたい。また、療育センターあおばとさらに連携を図り実践に役立つ研修を積み重ねていきたい。 ・教職員自身が教育環境の大きな部分を占めることを自覚し、教職員の人権意識を高めていく。		
学校関係者評価	・学校の学習や行事の中に地域の方が自然な形で参加していることは高く評価できる。学校は地域と積極的に連携を図っており良好な関係が築かれている。 ・地域行事等への子ども参加の低さは保護者の意識改革が不可欠である。地域への関心度、あいさつなどは保護者が率先垂範していく必要がある。 ・学校は、部分的な教科担任制や子ども相談室など子どもを多角的にみる努力をしていると評価している。今後はアンケート等で低い評価をしている子どもたちへの丁寧な対応を期待する。		
学校経営中期取組目標振り返り	・設定した重点取組についてはおおむね達成することができた。特に児童指導・いじめへの対応については丁寧な取組が成果に結びつき、改めて初期対応の大切さを組織として実感し評価できたことは大きい。 ・豊かな心の育成については課題が残る。特にあいさつについては校内の姿と地域での姿に開きが見られる。地域とさらにつながり、顔と顔の見え関係づくりを一層進めていく。 ・人材育成については今後も教職員自らが子どもにとっての最大の教育環境であるという自覚のもと		

重点取組分野	平成30年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①重点研究では「じっくり考え、高め合い、次につながる確かな学び」を目指して3年目の算教科に取り組み子ども一人ひとりの考えを広げたり深めたりできる授業の在り方を研究する。②週2モジュールのスキルタイムを3年以上に設定し基礎基本の定着を図る。③子ども・学校・家庭で共有化する目標の精度を向上させ一層の連携の充実を図る。		
豊かな心	①たてわり活動としてペア学年や学級での活動を充実させ、異年令同士のつながりを築くようにする。②保護者、地域とふれあう活動を大切にするとともに、『横浜の時間』では「人」とのつながりを生かした学習を展開する。③教育環境は教職員の言動が大きいという自覚をもち教師自身の人権感覚の一層の向上を図る。		
健やかな体	①一校一実践として「縄跳び」を取り上げ、学年長縄大会を通して体力の向上に励む。②日々の体育の授業で、一定の運動量を確保できるように配慮する。③学校保健委員会で「けがの予防」について取り上げ、子どもたちが主体的に怪我のない生活について考え実践できるように全校で取り組む。④栄養教諭と連携しながら全校で食育に関する授業を行う。		
児童指導	①児童支援専任との情報の共有化を密に行い、未然防止や適切な初期対応を行う。必要に応じて関連機関との連携を図る。②学級で起きる課題は学年主任を中心として児童支援専任が連携し、初期の段階で対応することを徹底する。③毎週1回の打合せでは、児童理解の時間をもち学校全体で共通理解し、一貫した児童指導を目指す。		
特別支援教育	①療育センターあおばのコンサルテーションや通級指導教室のセンター機能、学校カウンセラーの活用を積極的に図り、専門的見地からの助言を参考に、学習や生活の障害を減らすように努める。②教職員で教室環境のスタンダードをもとに過度な、あるいは不必要な環境刺激を取り除き、落ち着いた生活環境を実現する。		
地域連携	①学校教育で大事にしていることを学校運営協議会やPTA運営委員会、学校説明会、学校便り等で地域や保護者の方に伝え、ともに協力して子どもの育成を図る。②地域行事を広くしたり、職員の参加体制を整えたりして、地域とともに子どもの健全育成を図る。③自ら進んで挨拶する姿を認め、校内から地域へとあいさつ運動の活動を広げたい。		
安全管理	①「危機管理における初動対応の基本原則-プロアクティブの原則-」を機会あるごとに教職員に周知し、事故の未然防止や適切な初期対応を行う。②質の高い情報の取得に努め、適切な判断ができるようにする。③事故の予見を見落とさず、危険要因の除去に心掛ける。		
いじめへの対応	①「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を授業や学校行事の場面で活用する。②子ども一人ひとりの状況についての記録を作成し、校長をリーダーに、担任や各学年教諭、児童支援専任教諭からなるチームによる支援を進める。③3年生以上の一部教科担任制を継続し多角的な児童理解に努め、情報共有を図る。		
人材育成・組織運営	①バランスのよい年齢構成の職場と学年3学級の強みを生かし、学年が異なるキャリアステージで構成されるように配置し、学年内が学びの場になり刺激を受ける場になって、組織全体が支え合い高め合う集団となることを目指す。②メンターでの活動にとどまらず、経験豊かな先輩職員を講師に招き、主体的に学ぶ機会を設定する。		
ブロック内相互評価後の気付き			
学校関係者評価			
学校経営中期取組目標振り返り			